

土屋政雄訳『日の名残り』で描かれるイギリス

坂本佳桜里

はじめに

『日の名残り』は、カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954-) による *The Remains of the Day* という作品の日本語版タイトルである。土屋政雄によって翻訳され、日本では原書の翌年である1990年に中央公論新社より出版された。執事であるステューブンス (Stevens) が主人公であり、ダーリントン・ホール (Darlington Hall) という屋敷を中心に、各地を巡るイギリスらしい小説である。イシグロは本作品において「信頼できない語り手」という小説技法を使用している。これはウェイン・C・ブース (Wayne Clayton Booth, 1921-2005) の *The Rhetoric of Fiction* (1961) の中で登場する、「一人称の語り手は、主観的に自分やほかの登場人物の感情やコンテキストを語るために、話の内容が正しいのか否か読者を困惑させることになる」(奥, 2018, p.169) という技法である。ステューブンスは元主人であるダーリントン卿 (Lord Darlington) に関して「高德の紳士でした」(p.182) と語り、仕えることができたことを誇りに思うとまで述べたが、旅の途中で出会う人々にはダーリントン卿のことを隠すなど怪しい部分が浮かび上がってくる。誇りに思う仕事と述べるダーリントン・ホールで行われた国際会議については詳細な日時を記憶しているが、一方でミス・ケントン (Miss Kenton) とのいさかいなど自身にとっては良くない記憶はあいまいなどといった点があり、これらは技法の効果が表れているといえるだろう。しかし、イシグロ自身は作品の主人公たちが「信頼できない語り手」と呼ばれることについて不満を示している。平井 (2006) はこのことについて、イシグロとリンダ・リチャーズのインタビュー¹を挙げながら「彼の一人称による〈信頼できない語り〉は、従来考えられているような、『読者と、暗示的な書き手』とのあいだに、作為的に齟齬を生じさせるためのテクニク

上の方法ではなく、書き手、あるいは語り手の内面から必然的に生み出されたものだということである」(平井, 2006, p.61)と説明している。

なお、この作品は発表された1989年の10月にプッカー賞を受賞し、日本でも大きく報道されているが、このことについては第三章にて詳細を記す。

本論文では2005年にFABER&FABER社から出版された原書と、早川書房から出版された『日の名残り』(2017)を題材としながら、イシグロの英語を日本語化するにあたりどのようにして原書の魅力を失わないように自然に翻訳したのかを検証し、考察していく。『日の名残り』は中央公論社からも同じく土屋政雄が翻訳した日本語翻訳版が出版されているが、内容は同一である。今回はより最新である早川書房版を使用した。なお、同じく早川書房から出版された『日の名残り ノーベル賞記念版』(2018)であるが、こちらも本論文で使用した書籍を底本としており、内容は同一である。

イシグロは生い立ちなどで日本との関わりを強調されるが、日本にいた期間は短く自身の作品に登場する日本については「想像上の日本」と語る。故に、実際の日本を知る日本人の翻訳家にとっては原書のまま翻訳するか、事実に基づいて翻訳するかといった点で難しい問題となることもある。これについては第二章で詳しく述べる。ここでは『日の名残り』を題材としているが、イシグロ作品と日本についても焦点を当てる。これは、日本にルーツをもつイシグロ氏のバックグラウンドなどが、作品及び日本語翻訳にどのような影響を与えるのかをみるためである。まず、第一章で『日の名残り』の翻訳者である土屋政雄について述べた後、第二章でイシグロ作品と日本について述べ、次に第三章で原書と翻訳版を比較、登場人物や文中の描写等を分析する。この三点に焦点を当てることで、翻訳ではどのようにイシグロの「イギリス」が反映されているのかがみえてくる。

第一章 土屋政雄について

土屋政雄(1944-)は、日本語版『日の名残り』の翻訳を担当した人物で

ある。長野県松本市の出身。東京大学在学中にクレアモント・メンズ・カレッジ (Claremont Men's College、現在の Claremont McKenna College) に留学、大学を中退後、翻訳の道に進む。元はコンピューター製品のマニュアルを翻訳する技術翻訳を行っており、IBM 社製品のマニュアル翻訳も請け負っていた。その後、論文や一般書の翻訳を経験し、カズオ・イシグロの作品を翻訳することになる。

マニュアル翻訳をしていた際、特有の言葉をそのまま訳すか読者にわかりやすく訳すか迷うといった経験があり、正確な翻訳とは何かを考えるようになったという。2017年に行われたKK ベストセラーズのウェブサイト「BEST TIMES」によるインタビュー²では「英文を一度自分の中で咀嚼し、ポイントを理解して、自然な日本語に直す。これはもちろん文芸翻訳をするようになってからも意識していることです」と述べており、技術翻訳の経験が文芸作品翻訳でも生かされているとわかる。

土屋は『日の名残り』あとがきにて、本作との出会いを語っている。それは『バットマン』コミック版³の翻訳を終えた頃に訪れていた1989年のフィンランドでのことだった。現地で『プレイボーイ』(PLAYBOY)と『ペントハウス』(Penthouse)を購入する予定だったが、恥ずかしくなりたまたま隣にあった『ニューズウィーク』(Newsweek)を手を取ったのだという。その『ニューズウィーク』で『日の名残り』に関する書評を読み、翻訳してみたいと思ったところに翻訳依頼が来たのである。このことについても、KK ベストセラーズのインタビューにて「何か運命的なものを感じましたね」と述べている。

土屋は様々な翻訳を手掛けているが、カズオ・イシグロ作品では他に『私を離さないで』(Never Let Me Go, 2006)と『忘れられた巨人』(The Buried Giant, 2015)の翻訳も行っており、最近ではカズオ・イシグロ氏ノーベル賞受賞記念講演の書籍化である『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレイクスルー ノーベル文学賞受賞記念講演』(My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs, 2018)でも翻訳を担当している。

第二章 カズオ・イシグロと日本

イシグロは、「自作を翻訳でしか読まない読者を常に意識」(日吉, 2017, p. 5) すると言われているが、彼の作品を日本語翻訳する際にはいくつかの問題が生じる場合がある。莊中孝之は「イシグロが作品のなかで表出した日本の世界を、日本人翻訳者が既に持っている自国に対する知識やイメージと、どう折り合いをつけていくかということこそが、イシグロの作品を翻訳する際の課題」と述べる(莊中 2012, 60)。評判も英米と日本では異なり、英米ではイシグロの単純だが含みの多い文章に言及して称賛するなど好意的だが、日本では厳しい意見が多い。三浦雅士が「英国の友人によると、イシグロ氏の英語には日本の小説の英訳が持っているある種の雰囲気がある」(莊中, 2012, p.68 より三浦雅士の『日の名残り』書評抜粋)と述べているように、英語で読まないと言われない面白さがあると言われており、日本語訳では魅力が半減するという。ただし、イシグロ自身は日本という自身のバックグラウンドばかりに注目する欧米メディアに対して苦言を呈している。彼はインタビュー⁴で以下のように語ったことがある。

「テクニクの面では、私はいつも自分がかかなりイギリス的な作家だと思っていましたが、もちろんイギリスの批評家は常に私の日本的な背景に固執します。ですから長い間、私の書くものはきわめて日本的だと言われてきました。設定が完全にイギリスである三作目(“The Remains of the Day”)の場合さえ、何人かの批評家は私のスタイルが非常に日本的だと言っています。そしてこういうことを言う批評家は、大抵日本文学をほとんど知らない人たちなのです。」

実際に、*The Remains of the Day* の出版社でもある FABER&FABER 社は、イシグロの作品の表紙を内容とは関係なく日本的なものにしたことがある。「日本的」という先入観を持たれることがあるイシグロだが、『日の名残り』には

執事スティーブンスや英国ならではの屋敷ダーリントン・ホールが登場するし、『忘れられた巨人』(*The Buried Giant*, 2015) はアーサー王伝説を土台としている。イシグロ氏は5歳でイギリスに渡っていることもあり、日本の描写で不自然な部分は修正してほしいと依頼するなど実際の日本と自身の小説で描く日本にずれがあるのは理解していることもあって、イシグロの日本的なイメージに固執する英米の書評に苦言を呈するのだろう。

上で既に述べた日本では厳しい意見が多いというのもこのずれによるものであり、『浮世の画家』(*An Artist of the Floating World*, 1986) で登場する日本作品『ゴジラ』(1954)の描写の違和感や、『遠い山なみの光』(*A Pale View of Hills*, 1982)での原爆投下の位置の間違いなどを挙げられて批判されることがある。ステレオタイプの英米の書評を批判しつつ、自身も『浮世の画家』と『遠い山なみの光』などでステレオタイプの日本を描くという矛盾が生じているのである。日吉(2017, p.111)はこのことに関して、『浮世の画家』は「イシグロ自身が作家として置かれた状況を表現したメタフィクション」であり、「西洋人による日本への異国趣味に釈然としないものを感じながらも、結局は自らの出自を武器として、ステレオタイプな日本像を売りさばくことを選んでしまった自分、そしてその結果、自作の有する普遍性が読者からないがしろにされるという罰を受けることとなった自分自身の姿を自嘲的に描き出そうとしていた」と解釈している。そして、その自嘲的な描写は『遠い山なみの光』にも表れているという。

このようなイシグロ作品における日本文化の描写の違和感は、日本語版の翻訳家が頭を悩ませる部分である。『浮世の画家』を翻訳した飛田茂雄は、イシグロに依頼されて不自然な部分を修正した一人である。『浮世の画家』訳者あとがきにて詳細を語っているが、飛田もハードカバー版を出した際に「一部の人たちから、なぜ作品中の人名を漢字で表記したかという疑問が出された」(飛田, p.309, 2015)とあとがきで振り返っており、翻訳に苦勞している。飛田は読みにくさや、日本人が主人公なのにカタカナを使用しては不自然にみえるという点を考慮し、原文からはなるべく離れないように意識しつつ現代語で訳し

たと述べている。また、莊中（2017, pp.104-105）が紹介している『女たちの遠い夏』（『遠い山なみの光』改題前の日本語版におけるタイトル）で翻訳を担当した小野寺健であるが、彼もまたイシグロの描く日本に戸惑ったようであり、あとがきにて固有名詞の漢字表記に関して断りを入れている。固有名詞はすべてカナ書きにするつもりが、思いがけずイシグロからの「とある人物について、ある漢字表記は避けてほしい」という依頼で日本語版での漢字表記を期待していることがわかり、登場人物の名前に適切な漢字を当てることにしたのだという。

ノーベル賞受賞時の講演⁵でイシグロは以下のように語っている。

I'm now sure that it was this feeling, that 'my' Japan was unique and at the same time terribly fragile - something not open to verification from outside ... What I was doing was getting down on paper that world's special colours, mores, etiquettes; its dignity, its shortcomings, everything I'd over thought about the place, before they faded forever from my mind. It was my wish to re-build my Japan in fiction, to make it safe, so that I could thereafter point to a book and say: 'Yes, there's my Japan, inside there.'

「私はいま確信しています。「私の」日本という特異な場所はひどく脆い。外部からの検証を許さない。（中略）私がしたことは、あの場所の特別な色彩や風習や作法、その荘重さや欠点など、その場所について私が考えていたすべてを、心から永久に失われてしまわないうちに紙に書き残すことでした。私は自分の日本を小説として再構築し、安全に保ちたかったのでしょう。今後はいつも1冊の本を指差して、「そう、この中に私の日本があります」と言えるように。」

イシグロと家族は、最初は日本に戻るつもりでいたという。日本に戻った時のためにと送られてきた教育的な小包が来なくなり、自身の記憶や両親の話に

存在していた日本を通して作られた心の中の「日本」が出来上がった結果、それらを保存しようと思ひ立ち書き留めたのである。彼は川端康成や谷崎潤一郎などの日本文学の英訳は読むものの、ドストフスキー（Fëdor Mikhailovich Dostoevskii, 1821-1881）やチェーホフ（Anton Pavlovich Chekhov, 1860-1904）に影響を受け、シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-1855）を好んでいるということからも、単純に「日本」としてではなく「記憶の中の日本」を大事にしていることが考えられるのではないだろうか。

なお、「はじめに」で述べた『日の名残り』のブッカー賞受賞についてだが、これに関しては日本での関心も高かったようである。選考結果発表の翌日、その次の日ともに日本の新聞記事で取り上げられ、翌月にはイシグロの来日もあって大きな話題となる。この来日は5歳で渡英して以降初めてのことであり、多くのインタビューや対談が行われたという。本論文で取り上げた土屋の『日の名残り』翻訳版が最初に出版されたのは翌年の1990年のことであり、あわせて話題となった。莊中（2012,p.190）はこの流れを受けた当時の特集や論文等を紹介しつつ「この長編第三作⁶の発表によって、日本におけるイシグロへの評価も不動のものとなったように考えられる」と述べ、「長編第二作⁷までの、奇妙な日本の世界を描く長崎生まれの珍奇なイギリス人作家といった、やや偏見に満ちた作家像から、正統的イギリス文学の系譜に連なる本格的な英国作家へと、そのイメージは変わっていく」とまとめている。

そのイシグロ像の変化によるものなのか、『充たされざる者』（*The Unconsoled*,1995）の日本での評価は、評価が二分した本国イギリスとは違い好意的だったという。ただし、『わたしたちが孤児だったころ』（*When We Were Orphans*, 2000）とあわせて日本ではあまり多く研究されることはなく、『日の名残り』ほどの反響がみられなかったようである。

次に日本で反響があったと思われるのは土屋が再び翻訳を担当した『わたしを離さないで』（*Never Let Me Go*, 2005）である。この作品は英米、日本ともに高評価を得たようであり、英米では新聞や雑誌のベストブックとしても選ばれた。20世紀フォックスによって2010年に映画化され、日本でも2014年に

舞台化、2016年にドラマ化されている。2017年、イシグロがノーベル賞を受賞したことで、今後はどのような評価がされていくのかは興味深いところである。

第三章 *The Remains of the Day* と『日の名残り』の比較

第一節 日本語版の特徴

KKベストセラーズのインタビューで、土屋はカズオ・イシグロについても解説しており、イシグロの文章については「読みやすい」と述べていた。彼は「イギリス人のために書きたくない」というイシグロの信念を紹介し、イギリス人というよりも世界の読者に向けて書くことを意識しているようだ、とみていた。更に、「翻訳していても、特殊な表現方法とか、特殊な話題であるとか、つかえる所はなかった」と振り返っている。テクニカルライティング⁸で使われる文章の難しさを測る尺度「フォグカウント」を例に出し、「12、3年、英語圏での教育を受けていれば理解できる文」であるとも分析していた。

山岡(2007)は、土屋政雄訳の『日の名残り』を絶賛している。彼は以下の箇所からみられる土屋の訳における特徴を解説し、「原文を読んで原著者になりきり、日本語で小説を書いているのだと。訳すのではなく、書く。これが土屋訳の特徴です」と述べている。

It seems increasingly likely that I really will undertake the expedition that has been preoccupying my imagination now for some days. An expedition, I should say, which I will undertake alone, in the comfort of Mr Farraday's Ford; an expedition, as I foresee it, will take me through much of the finest countryside of England to the West Country, and keep me away from Darlington Hall for as much as five or six days.
(p. 3)

ここ数日来、頭から離れなかった旅行の件が、どうやら、しだいに現実のものとなっていくようです。ファラディ様のあの立派なフォードをお借りして、私が一人旅をする——もし実現すれば、私はイギリスで最も素晴らしい田園風景の中を西へ向かい、ひょっとしたら五、六日も、ダーリントン・ホールを離れることになるかもしれません。(p. 9)

山岡はこのプロローグについて「一人旅をする」「ひょっとしたら、五、六日も、ダーリントン・ホールを離れることになるかもしれません」という部分で物語の展開も予想がつく上、preoccupying my imaginationを「頭から離れなかった」とすんなり訳せるだろうか、と説明している。また、辞書を引いて訳語をただ当てはめるのではなく、原文の意味をとらえて表現する「本物の直訳」だとも語る。

The idea of such a journey came about, I should point out, from a most kind suggestion put to me by Mr Farraday himself one afternoon almost a fortnight ago, when I had been dusting the portraits in the library. In fact, as I recall, I was up on the step-ladder dusting the portrait of Viscount Wetherby when my employer had entered carrying a few volumes which he presumably wished returned to the shelves. On seeing my person, he took the opportunity to inform me that he had just that moment finalized plans to return to the United States for a period of five weeks between August and September. Having made this announcement, my employer put his volumes down on a table, seated himself on the chaise- longue, and stretched out his legs. It was then, gazing up me, that he said. (p. 3)

この旅行の話は、もともとファラディ様のまことにご親切な提案から始まったことです。二週間ほど前、私が読書室で肖像画のほこりを払って

たときのことでした。脚立にのぼり、ちょうどウェザビー子爵の肖像画に向っておりますと、ファラデイ様が棚にもどす書物を数冊、腕に抱えて入ってこられました。私を認め、ちょうどよかったという表情で、「やっと決めたよ。八月九月は、五週間ほどアメリカへ帰ってくることにした」と告げられたあと、書物をテーブルに置き、長椅子に腰を下ろし、脚を伸ばして私を見上げながら、こう言われたのです。(pp. 9-10)

山岡(2007)は、この部分について原文では間接話法になっているファラデイ氏の言葉を直接話法に変えて訳していると指摘している。この方法は冒険だと山岡は語るが、土屋の訳に関しては「いったんこの訳を読めば原文から他の訳が思いつけなくなるほど、物語の世界にびったりです」と称賛する。また、Mr Farraday, my employer, he といった原文を「ファラデイ様」とした訳にも着目している。同じ言い回しを嫌う英文では様々な言葉に切り替わるのは当然のことなのだが、そのまま Mr Farraday を「ファラデイ氏」、my employer を「私の雇用主」、he を「彼」とすると日本語としては不自然であり、まさに翻訳文だという印象を受ける。これを「ファラデイ様」とすることで自然になり、また、スティーブンスの立場も明確になるというわけである。

日本語版の土屋による訳者あとがきには「スティーブンスの父親の転倒に頭を悩ました」と書かれている。父親の転倒(夏)とダーリントン・ホールでの国際会議(3月)にて時間のずれがあり、矛盾していた。訳者がイシグロに問い合わせたところ誤りであり、Summer としていた箇所は Sunny (「ある晴れた日」)に変更されることとなった。もし問い合わせなければ、土屋の最初の考え通りにスティーブンスの衰えの象徴として記憶違いということになっていた可能性もある。第二章で述べたが、カズオ・イシグロは間違いを直してほしいと依頼することもある人物である。ただしほとんどが日本を舞台にした作品の場合であるため、『日の名残り』のようにイギリスが舞台の小説では珍しいのではないだろうか。とはいえ、作者、翻訳者両方に作品に対するこだわりがみえる部分でもある。ただ単純に原文通り訳すのではなく、原著者になりきっ

て書くという山岡の批評通りに土屋の翻訳姿勢を表しているとも考えられる。このような物語中の時系列のように細かい部分にも気を配るとするのは、翻訳上、非常に大切だということに改めて気づかされる。原著者になりきるという翻訳スタイルは他の文学作品を読み解く上で、原書と翻訳を比較する場合にも参考になるだろう。

第二節 登場人物分析

ここでは、登場人物について原書と比較し、一人称等日本語の特徴がどのように訳に反映されているのかまとめ、日本語ではどのように登場人物が描かれているのかをみる。

①スティーブンス (Stevens)

『日の名残り』における主人公であり語り手。ダーリントン・ホールという屋敷に勤めている執事。現在はファラディ氏に仕えているが、かつてはダーリントン卿に仕えていた。ファラディ氏に小旅行を提案され、かつての同僚であるミス・ケントンを訪ねることにする。執事の「品格」(原文は *dignity*) とは何か? を追求し続けているが、いわゆる「信頼できない語り手」であり、彼自身の偏見ではないかという部分や、都合の悪い記憶はあいまいになっていることがあり、自身が信じていた「品格」も次第に揺らいでいく。

一人称は「私」。ダーリントン卿やファラディ氏はもちろん、ミス・ケントンや自身の父に対しても丁寧な口調が使われている。会話文以外の彼の語りにおいても基本的にですます調が使われている。これらは、イシグロが述べたという「英国人よりも、ずっとイギリス人らしい」(平井, 2011, p.81) 彼の立場をわかりやすくしている。また、「イシグロの執事は、目盛つきの階級意識、細目へのこだわり、完璧主義、人をもてなすことへのひたむきさの点では、まことにイギリス人らしく、日本人でもよかったほどである」(平井, 2011, p.81 よりピコ・ライヤー (Pico Lyre, 1957-) の指摘) ということもあり、地の文でも丁寧語を使用するという訳は適切であるといえる。この丁寧さがあること

で、スティーブンスの「信頼できない語り手」という部分も引き立つのではないだろうか。

'Yes, sir.' 'Indeed, sir.' (p.65 他)

「さようでございます」「なるほど」(p.87 他)

'Sir?' (P85 他)

「はあ?」「何でございますか?」(p.117 他)

これらは、ファラディ氏やダーリントン卿、レジナルド・カーディナル等身分が上の人物に対しての言葉遣いである。英語では一つの言葉で様々な場面に対応できるが、日本語では応対にも多くの形があるため、土屋の訳でも前後の文や状況に合わせた言葉が使われている。

'More like swallows than crows, I would have said, sir. From the migratory aspect.' (p.17)

「カラスというより、ツバメではございますまいか。それ、渡りの習性がございますから」(p.28)

'A local variation on the cock crow, no doubt.' (p.138)

「では、ご当地ではメンドリが時をつくるものと見えますな」(p.185)

いずれも、ファラディ氏のためにとジョークを習っていた彼が放ったものである。最初の「カラスというより～」は、ファラディ氏の軽口を屋敷に来たジプシーのことだと思い込んだことによるものであり、次の「では、ご当地では～」は、この宿は眠れないとスティーブンスに教えた農夫の「朝は朝で、今度は、夜明け前から女房どのが亭主を怒鳴りつける声が響き渡るし……」(p.184)といった発言を受け、気のきいた返答をしようと思いついたスティーブンスが一生懸命答えるという場面である。

ジョークの翻訳というのは訳者のセンスが問われるものでもあるが、ス

ティーブンスのジョークはどちらも良い反応を得られなかったということもあって、ジョークだが特に面白いわけではないといった微妙なニュアンスを出すことも要求されている。二番目のジョークでは、スティーブンスはこの返答が受けなかったことを気にしており、「主人の女房がニワトリに似ていると言ったように捉えられるのでは」と考えているのだが、このように後に展開される物語にも自然に繋がっている。

① ファラデイ氏 (Mr Farraday)

屋敷を買い取り、ダーリントン・ホールの主となったアメリカ人。スティーブンスの新しい雇い主。アメリカに帰省することになり、スティーブンスに小旅行を提案する。彼のアメリカ人らしいフレンドリーな性格はスティーブンスを戸惑わせている。自身が所有することになったダーリントン・ホールを友人のウェークフィールド夫妻に自慢するが、夫人に疑われた際には不満をみせ、「ぼくは本物が欲しかったんだ。ぼくが手に入れたものはそうじゃないのかい？」(p.179)と語るなどイギリスの由緒ある文化や遺産に対する想いは強い。

一人称は「ぼく」。以下のようにくだけた口調が使われている。スティーブンスをはじめダーリントン卿やミス・ケントンなどかつて屋敷にいた人たちとは異なる印象を与えるのではないかと考える。ファラデイ氏の口調は若さをうかがわせるレジナルド・カーディナルと似ており、ダーリントン卿のような「イギリスの紳士」らしさはない。‘Indeed, sir?’ (p.130)「さようでございますか」(p.178)と答えるスティーブンスに対して‘Indeed, Stevens.’ (p.130)「さようでございますのだ、スティーブンス」(p.178)と答える場面もあるなどユーモアを感じさせる部分も見受けられる。

‘Maybe you could keep her off our hands, Stevens. Maybe you could take her out to one of those stables around Mr Morgan’s farm. Keep her entertained in all that hay. She may be just your type.’ (p.15)

「あの女を遠ざけておく方法はないかな、スティーブンス？ そうだ、君が

モーガンさんの厩に連れてって、あの藁の中でたっぷりもてなしてやるってのはどうだい？ 君の好みのタイプかもしれないぜ」（日本語版 pp.25-26）

これは、屋敷にゲストが来るという時に、奥様は同行するのかとステーブンスが聞いたときのファラディ氏の返答である。ステーブンスははじめ、この返事を冗談だと受け止められずにいた。物語の序盤ではこのような発言に対してどう受け答えすべきなのか戸惑っており、ジョークの練習をするようになるのだが、このステーブンスの戸惑いからも、ファラディ氏が今までのイギリスの紳士とは違うということが読み取れるのではないだろうか。この部分では原文通りの断定口調ではなく疑問形を使うことでステーブンスに語りかけるような訳になっているため、ファラディ氏のフレンドリーな部分がより強調されている。

② ミス・ケントン / ミセス・ベン (Miss Kenton/Mrs Benn)

かつてダーリントン・ホールで働いていた、ステーブンスの元同僚。結婚して屋敷を去り「ミセス・ベン」となったが、ステーブンスは回想の中で彼女を「ミス・ケントン」と呼ぶ。ステーブンスは人手不足解消のためもあって彼女を呼び戻そうとする。ダーリントン卿の命令を絶対視し忠実であろうとするステーブンスとは異なり、ダーリントン卿がユダヤ人のメイドを解雇する命を下した際には怒りもあってか辞めようとしていた。ステーブンスの態度を疑問視していたのか、「なぜ、あなたはいつもそんなに取り澄ましていないのです？」(p.216)と言ったこともある。ステーブンスの父がダーリントン・ホールに雇われた際には、彼の異変を息子であるステーブンスより先に気付いていた。

一人称は「私」で、屋敷にいた頃も結婚後も口調は変わらず、女性語である「～ですわ」や「～かしら」などが使われている。

'It seemed such a pity your room should be so dark and cold, Mr Stevens, when it's such bright sunshine outside. I thought these would enliven things a little.' (p.54)

「外はお日さまがまぶしいほどですのに、この部屋は暗くて、冷たくて、お気の毒ですわ。お花でもあれば、少しはにぎやかになるかと思ひまして」
(p.71)

彼女が屋敷に来て間もなくのこととスティーブンスは回想しており、プライベートな自室でも余計なものがなく寂しいスティーブンスと、彼のもとにやってきたミス・ケントンという対比とも読み取れる場面である。既に前後のところで Mr Stevens と呼び掛けているためどくなるのを避けてか、この文では Mr Stevens と明言されていない。そして、「花瓶をかかえて入って来た」というミス・ケントンの状況をふまえて、these は「お花でもあれば～」という訳になっている。これは、原文だけでなく前後の文脈も考慮されているという翻訳の例といえるだろう。

④ダーリントン卿 (Lord Darlington)

かつてダーリントン・ホールの主であり、スティーブンスの雇い主であった人物。ナチスと関わってしまったことから、戦後から晩年までは悲惨な様子だったのでないかとうかがえる。スティーブンスは彼のことを「高徳の紳士でした」と語り、繰り返し感謝を述べるなどしているが、一方で知らないふりをしたこともある。ユダヤ人のメイドを解雇するようスティーブンスに命じるが、後に解雇を後悔していたと語られている。

一人称は「私」。「～だな」「うむ、～だろう」「～ではあるまい？」などの口調で地位が高く、年齢も若くない男性像を浮かばせる。

'I mean *considerable* repercussions. On the whole course Europe is taking. In view of the persons who will be present, I do not think I

exaggerate.’ (P65)

「うむ、相当な影響があるだろう。ヨーロッパが今後どのような道を選んでいくか、にだ。ここにやってくる顔触れからして、これは誇張ではあるまい？」 (p.87)

この場面も、他と同様会話に合わせて自然に翻訳されている。屋敷での国際会議に関して、「この屋敷内で起こることは、相当な影響を及ぼすかもしれない」 (p.87) とダーリントン卿が言い、ステーブンスが「さようでございます」と肯定したのち、再び「影響があるだろう」と述べているのである。I mean~で始まる原文には、「うむ」に相当する言葉はないし、I do not think I exaggerate. と終わる文は疑問文ではなく否定文だが、次のステーブンスの返答は No, sir. 「とんでもございません」のため、違和感なくつながっている。

⑤レジナルド・カーディナル (Sir Reginald Cardinal)

ダーリントン卿の友人であるデイビッド・カーディナルの息子。ダーリントン卿は彼の名親だった。ダーリントン・ホールでの国際会議時は父の秘書だったが、のちにコラムニストとなった。ナチスと近づくダーリントン卿を止めようとしており、ステーブンスにこのまま黙って見ているのかと問いかける。ステーブンスがミス・ケントンと再会した時に話題に出ており、ベルギーで戦死したことが判明する。

一人称は「ぼく」。以下はダーリントン・ホールでの国際会議の際にデイビッド・カーディナルの秘書として屋敷を訪れた際のステーブンスとの会話の一部である。ここでは、あえて原文にはない末尾の「～ね？」を付け加えているが、この後にはステーブンスの「それはたいへん困ったことになりましょう」(‘That would be most awkward, sir.’) が続くため、この付加疑問文をつけることで、レジナルドのこの発言がより強調されることになる。

I suppose you’ve been wondering why I never let go of this case. Well,

now you know. Imagine if the wrong person opened it.' (p.88)

「ぼくがこのケースを片時も放さないのを、不思議だと思わなかったかい？
これで理由がわかったろう。誰かの手で開けられたときのことを考えてみ
たまえ。ね？」(pp.120-121)

⑥その他

労働者階級の男 (A man)

旅に出たスティーブンスが最初に出会った人物。痩せていて白髪、労働者風の布帽子をかぶりパイプを使っていた。口調や笑い声から、スティーブンスは最初良い印象を受けなかったが、彼の言う通りに丘を登ってみると美しい田園風景を見ることができた。

一人称は「わし」。「もうちっと」「～でさ」「～ありませんや」等田舎の老人のような口調。英語では訛りがないように見受けられるが、スティーブンスが「一瞬、浮浪者かと危ぶみました」(p.36)と言ったような容姿描写もあるため、このような口調にすることで、執事でありながら紳士と形容されるスティーブンスとの違いが出る。

'I'm telling you, sir, you'll be sorry if you don't take a walk up there. And you never know. A couple more years and it might be too late' (p.25)

「登っておかないと後悔しますぜ、旦那。絶対でさ。それに、人間、何が起こるかわかりませんや。二年もしてみたら、もう遅すぎた、なんてね」
(p.37)

第三節 作中用語

土屋の日本語訳では、日本らしい訳が使われていることがある。わかりやすくするためにその国らしい訳にすることは一般的に行われていることだが、ここでは日本語訳の特徴的な箇所として以下のように挙げる。

原 書	日本語訳
Crossed Keys (p.172)	十字鍵亭 (p.230)
Simply a sentimental love story (p.176)	おセンチな恋愛小説 (p.236)

Crossed Keys は、ガス欠を起こしたスティーブンスが村で宿を尋ねた際、いつもならゲストはここに泊まるのだが、と言われた際に出た宿の名称。「亭」というのは日本的な言葉ではあるが、宿の名称だと一瞬で把握することができる上、人物の会話文中の言葉であるため短くまとまっている訳の方が適切だと思われる。Simply a sentimental love story も sentimental を「感傷的」と訳すよりはわかりやすい。「おセンチ」といった言葉自体は現在では死語かもしれないが、『日の名残り』翻訳版が最初に出たのが1990年のことであり、またこの言葉もスティーブンスの回想に登場するミス・ケントンの台詞ということ考えると特に不自然ということもないだろう。

おわりに

『浮世の画家』『遠い山なみの光』で日本を描いたカズオ・イシグロが、イギリスらしき前面に押し出した『日の名残り』。この作品で、彼は日本というバックグラウンドにとらわれずブッカー賞受賞も果たした。ただし、イシグロはノーベル賞受賞時の講演で単にイギリス的とは言っても、サルマン・ラシュディ (Ahmad Salman Rushdie, 1947-) や V・S・ナイポール (Vidiadhar Surajprasad Naipaul, 1932-) 等のイギリス中心主義ではない作品を書きたかったと述べている。そして、「わたしの書くイギリスは、一種神話的なイギリスとなるでしょう。そういうイギリスのおおよその姿形は、現実のイギリスをまだ訪れたことのない人々も含め、世界中の人々の想像力の中にすでに存在している、と私は信じました。」(2018, pp51-52) とも語る。これは「自分の知る日本を書き残したかった」という彼の日本への想いにもつながるのではないだろうか。

第二章で、イシグロの日本は翻訳が難しいと述べたが、上記のイシグロの発言をみるに、イギリスが舞台でも難しさは同じであり、彼の想像上の舞台に多くの翻訳家が頭を悩ませてきたことだろう。しかし、本論文でも取り上げた『日の名残り』の土屋をはじめ、『浮世の画家』の飛田茂雄、『遠い山なみの光（もしくは、女たちの遠い夏）』の小野寺健などは、日本とイギリスをバックボーンに持つイシグロの複雑な作品を苦心しつつも忠実に翻訳しており、イシグロの作品内にある日本やイギリスを楽しむことができる。『日の名残り』では、第三章で紹介した山岡の「原文を読んで原著者になりきり、日本語で小説を書いているのだ」の通り、日本人にとって馴染み深い言葉も使うことで、読者を物語の世界に引き込みやすい形となった。さらに、土屋はイシグロの、リアリティがありながら読者が想像するような執事、マナーハウスといった伝統や歴史がそのまま表れている「神話的な」イギリスをうまく日本人読者にわかりやすいように昇華している。読者にわかりやすい訳が、結果として「神話的な」イギリスを守っているのである。このような優れた翻訳によって、私たちがイシグロが残した想像上の日本とイギリスを楽しむことができるのである。

注

1 Richards, Linda. "Interview with Kazuo Ishiguro". January Magazine, 2000, www.januarymagazine.com/profiles/ishiguro.html.

2 KK ベストセラーズによって行われ、ウェブサイト『BEST TIMES』によって配信された、以下三つのインタビューによる。別冊宝島編集部編『カズオ・イシグロ読本』東京：宝島社,2017. に収録されている。

「カズオ・イシグロ『名翻訳家』の意外な過去。『日の名残り』に会おうまで」(2017年10月16日配信)

「12～13.カズオ・イシグロを“数字”で読む。『名翻訳家』が出した数字の意味とは？」(2017年10月17日配信)

「カズオ・イシグロ『名翻訳家』が選ぶ、イチオシの作品とは？」(2017年10月18日配信)

3 オードウェイ, J画 オニール, D作 土屋政雄訳『バットマン：ワーナー映画公式原作コミック』東京：中央公論社, 1989.

4 日吉信貴『カズオ・イシグロ入門』東京：立東舎,2017. p.28より抜粋。『日の名残り』ブツ

カー賞受賞後、青木保によって行われた。

5 イシグロ, カズオ 土屋政雄訳『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレイクスルー ノーベル文学賞記念講演』東京：早川書房, 2018. pp.36-39

6『日の名残り』のことである。

7『浮世の画家』のことである。

8「理解しやすい文で情報を正しく伝播すること」(木村ほか, 1990, p.185) を目的としたもの。

Works Cited

Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. London: FABER&FABER, 2005.

Richards, Linda. "Interview with Kazuo Ishiguro". *January Magazine*, 2000, www.januarymagazine.com/profiles/ishiguro.html. Accessed 21 November 2018.

イシグロ, カズオ 飛田茂雄訳『浮世の画家』東京：早川書房, 2015.

イシグロ, カズオ 土屋政雄訳『日の名残り』東京：早川書房, 2017.

イシグロ, カズオ 土屋政雄訳『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレイクスルー ノーベル文学賞受賞記念講演』東京：早川書房, 2018.

奥聡一郎「コーパス文体論と『信頼できない語り手』—カズオイシグロの『日の名残り』の分析試論—」『科学／人間 第47号』pp.169-173, 神奈川：関東学院大学理工学部建築学科・環境学部教養学会, 2018.

木村真理子ほか「科学技術論文のためのテクニカルライティング—並列表現と修飾表現が存在する場合—」『全国大会講演論文集 第41回 人口知能及び認知科学』pp.185-186, 情報処理学会, 1990.

「国立国会図書館サーチ バットマン：ワーナー映画

公式原作コミック」国立国会図書館 . iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000002012379-00. Accessed 14 November 2018.

「土屋政雄 著者プロフィール」新潮社 . www.shinchosha.co.jp/writer/2148/. Accessed 14 November 2018.

荘中孝之『カズオ・イシグロ—〈日本〉と〈イギリス〉の間から』神奈川：春風社, 2012.

平井杏子「カズオ・イシグロ 境界線のない世界」東京：水声社, 2011.

平井法「カズオ・イシグロ『充たされざる者』論—〈信頼できない語り手〉

をめぐって」『学苑・人間文化学科特集 第785号』pp.60-69, 東京：昭和女子大学, 2006.

日吉信貴『カズオ・イシグロ入門』東京：立東舎, 2017.

別冊宝島編集部編『カズオ・イシグロ読本』東京：宝島社, 2017.

山岡洋一「翻訳は、日本語だ——土屋政雄訳カズオ・イシグロ著『日の名残り』」『翻訳通信』:
pp.1-5, 2007.